

●特に私がお前を選んだのは（…）（詩）

池田桂一

これは、タイトルを「私の椅子 その一」とする詩の冒頭の行。この行を含む一連では、「お前を選んだ」理由とわかっていいことが確かめられ、二連目で、聞きあっていることそれらが、そのまま「ふたりの詩」になった、と云う。ひとつの出会いから、問答のようなことがおこなわれる。お互いにしらないことが多いのだ。しることが何かみずみずしいものになった。ことばはそこでおのずと洗われて、詩のようになる。ポエジーであり、そのままポエム。

●ビルの上^へにかかる満月見つゆく闇にただよう冷気まといて

市川茂子

ビルの上にかかる満月は景としてはその通りのものだが、見つゆく、では景としてつながっているとということだろう。上句は近代以降のもの。ところで、闇にただよう冷気はどうだろうか。それを「まといて」という。ここでの身体性、感覚は過去をひくようなのだ。満月の明るさがきわだたせる闇、その対照性に底流する冷気。つぎの歌の「身にしみる風に吹かれて…」につながる。

なお改元を間もなくとする歌が二首。ひとつはやや重く、もひとつは重くなく詠っている。

重ね来し齡に昭和、平成の思いはるかに改元を待つ

澄みわたる空に己れの来し方を放って在りたし改元の時

●「いはし雲出たら鰯」と送りくれる銚子の港に一会の漁師

河村郁子

一連「平成三十年十月」のタイトルの下、歌はいろいろ。

掲出歌は季節の歌でもある。銚子港は鰯の主な水揚げ港で、秋の鰯は下り鰯といって、脂の乗りがいいともいう。送ってもらうことにしていたのか。作者は旅慣れた人でもあるが、一会の人を大事にしているようだ。やりとりの姿も浮かぶ。

今夏の猛暑のあとの「残^{のこ}んの熱（に）」（冒頭の歌）もあるが、こんな歌、

日本橋べつたら市に着はじめし羅紗のオーバー 夜寒かりき

作者はまた日本橋生まれ。オーバーの生地^{生地}の羅紗にも懐かしいものがある。

●何十年ぶりに会ふとふ連れあひの同級生なり 長月は過ぐ

布宮慈子

連れあひの同級生、でくくり。長月、ここでは月日というくらいに読んだ。結句は作者の嘆息あるいは納得か。

その同級生の住む「村上（市）」（タイトル）をつれあいとふたり車（マーチ）でめざす、その旅の始終が一連になっている。「われら内陸びとは」という把み方も面白い。

村上の町屋のひとつに飾られている知人の絵。この知人が掲出歌の同級生であること。何十年ぶりの同級生とつれあひの交感に、作者はやや距離をたもちつつあたたかい。普通に喋る、がいい。

変はりたるそれぞれの面^{おもて}さておきて作品見つ普通^{普通}に喋る

●夏休み中の図書館内に少年ら一人一人になれぬ塊り

小野澤繁雄

初句は字余りだが、後半は定型に収め、しかも突き放したような体言止めである。夏休みの気だるさや少年期の不安定な気分、仲間から離れられない弱さがうまく描写されている。

消毒のようなることに干ぞりたる沼底にはや青草育つ

「ひぞる」は「乾反る・干反る」で、かわいてそりかえること。消毒をするようなことになり水抜きし乾いて振り返った沼の底には早くも青草が生えてきている、という意味。「干ぞる」がわかれば素直な歌。

「宇宙」が付く生活なれどと金井さん普通の生活スベシヤルはなし

ネットで調べてみるまで意味不明で、詞書があればと思つた。金井さんとは、国際宇宙ステーションに百六十八日間滞在し、二〇一八年六月三日（日本時間）にソユーズ宇宙船にて地上へ戻ってきた金井宣茂のりひげ宇宙飛行士のこと。インタビューに「宇宙はほんつとにいいところですよ肩こりはなくなるし腰痛もなし。夜はよく眠れるし、宇宙食は美味しい。宇宙はこんなにもいいところなのか、帰りたくないと思いました」と、宇宙での生活は普通でそれが驚きだったと答えている。

●秋澄むや音先立てて堰の水

谷垣満壽子

季語は「秋澄む」で、秋になって大気が澄みきつた様子をいう。音を先立たせて水が堰を流れていく、

と軽快に表現している。水の透明感を感じさせ、なによりも音が先との発見があった。

ツクサの瑠璃に囲まれ道祖神

こちらは視覚に訴えてくる句。露草はどこにでもあるような花だが、ひっそりと咲くので注意しないと見逃してしまう。道祖神はさまざまな役割をもつた神で、決まった形はないらしい。いかにも無骨な道祖神がるり色の花に囲まれて、まるで笑っているように感じられるのはわたしだけであろうか。

●大朝日山頂小屋と月並ぶ

新野祐子

爽やかにナチュラリストの家つづく

「朝日鉱泉行」と題する一連。朝日鉱泉は、山形と新潟の県境にある朝日連峰の主峰・大朝日岳の東麓、朝日川溪谷にある山の湯。古くから胃腸病に特効があるとして有名で、湯治場として賑わった。「朝日鉱泉ナチュラリストの家」は、山形県のほぼ中央、西村山郡朝日町にある。朝日連峰の登山基地として知られており、建物からは大朝日岳（一八七〇m）が正面に見えるという。また溪流釣りもできて、絶好の避暑地であるらしい。はじめの句は「ナチュラリストの家」から眺めた景。おそらく翌日登る山と思いがけなく小屋と並んでいる月を見ながら、静かに胸を躍らせている場面であろう。次の句の「つづく」は、いい具合に時間が経過していると読んだ。次は、色彩豊かで印象に残る二句である。

ブナハリタケ白きわだちてきわだちて

山葡萄かつて疲れを知らざりき